

「限界の彼方」に挑む旅について語りたいたと思いますが、私の行う報告は、ハンドアウトAに示されているような人物に関係しています。大きく2つに分けて、1つのグループは1265年に生まれ、700年前の1321年に亡くなったダンテとその同時代人、周辺人物ら。もう1つのグループは、騎士道物語詩『モルガンテ』 (*Il Morgante*) の作者として知られる15世紀の詩人プルチと彼に関係づけられる人物です。最初のグループに属しているのは、『東方見聞録』の情報提供者として密接に関係しているマルコ・ポーロ、フランチェスコ修道会の一員であったオデリーコ・ダ・ポルデノーネ、13世紀ジェノヴァ出身の航海者ヴィヴァルディ兄弟です。2番目のグループには、プルチの情報源として言及されているアンジェロ・ポリツィアーノ、アメリカ大陸の発見者として知られるコロンブス、そして『太陽の都』の著者カンパネッラです。

さて、ハンドアウトBに移り、「ダンテとオルランド伝説」に触れます。『モルガンテ』の日本訳はありませんが、プルチのこの作品は、カルロ大帝 (シャルル・マーニュ) の甥オルランド (ロラン) が、ピレネー山脈に位置するロンチズヴァッレ (ロンスヴォー [仏]、ロンセスバリエ [西]) で、スペインのサラセン兵から攻撃を受けて戦死するという物語です。オルランドのこの伝説は、11世紀末には当時の北フランスのことばで書かれた『ロランの歌』 (*Chanson de Roland*) を生み出したし、イタリアではフランコ・ヴェネト語 (=ヴェネト語の影響を残したフランス語) で作品が書かれ、ロンチズヴァッレで戦死する以前のオルランドのことが語られました。ダンテが、『ロランの歌』を読んだか聞き知っていたことは、ハンドアウト1から明らかです。(引用を始めます) 「あの [ロンチズヴァッレでの] 悲しい大敗—そこでカルロ大帝は聖なる騎士らを失った—の後、オルランドといえども、これほど凄まじくは [角笛オリファンテを] 吹き鳴らさなかった」 (引用を終わります)。オルランドは自分の危機をカルロに知らせるために角笛を吹くわけですが、このエピソードには、プルチも言及しています。脚注1をご覧ください。(引用を始めます) 「オルランドはやはり [角笛を] 鳴らすことに決めた。カルロに生じたことを知らせるためであった。オルランドはたいそう強く吹き鳴らしたから、カルロはそれを聞きつけた。トゥルピーノの語るころでは、オルランドの口や鼻からは血が溢れ出た。そして、オルランドが3度目に自分の口に当てた時、角笛は割れ裂けた」 (引用を終わります)。戦死したオルランドは、『神曲』では、ハンドアウト2にあるように、キリスト教のために戦った騎士として、伯父カルロとともに、火星天の十字架の中に位置づけられています。プルチはこのことも自分の情報源にしています。脚注2をご参照ください。

戦死する以前のオルランドは、サラセン教徒の世界に冒険に出る遍歴騎士の側面を有しています。その意味では、日常的な世界の枠組の外に出てゆく人物であったわけです。プルチが語るころ (『モルガンテ』第1歌11-19節) では、オルランドは自分の義父・継父ガーノの嫉妬と讒言に憤慨しながら、異教徒の世界に旅立ちます。ダンテの同時代人が東方について知っていたこと1つには、「山の老人」 (*Veglio della Montagna*) のことがあります。ハンドアウトCには、この「老人」に関係する資料を集めておきました。マルコ・ポーロは『東方見聞録』でこの「老人」について語っておりますし、伝道師として活動したオドリーコもやはりこの人物について語っております。詳しくはハンドアウト3から5をご覧ください。「老

人」は麻薬（ハシッシュ）を用いて、頑健な若者らを薬物依存の状態に陥れ、「刺客」（assassino）に仕立て、邪魔者を殺害させていた恐るべき悪人でした。ハンドアウト3の一節を読んでおきましょう。（引用を始めます）「<老人>は自分の宮廷に、勇猛な刺客になりそうな、12歳のすべての少年をかかえていた。<老人>は少年たちを、4人ごと、10人ごと、20人ごとに庭園に入れさせていたのだが、彼らに飲み物として阿片を与えさせると、少年たちは3日間ぐっすりと眠った」（引用を終わります）。目覚めた少年たちは、「天国」とも思えるすばらしい快樂の庭に自分がいることに気づき、そこから運びだされると必死で帰還することを望み、大胆なことをも敢えて試みる、忠実な「刺客」に変貌いたしました。

「老人」に対する「刺客」の忠実さが、13世紀の恋愛詩では、貴婦人に対する詩人の嘘偽りのない愛を表現する道具として活用されました。ハンドアウト6から17までに用例を掲げておきました。11にあります、作者不詳の長い詩『愛の海』（*Mare Amoro*）は、たとえば、「私はあなたを愛し、刺客が<山の老人>にする以上に、ずっと忠実に仕える」と歌っております。用例には、トルバドゥールや13世紀のシチリア派の詩人、トスカナ地方の詩人らが含まれており、ボッカッチョも「老人」に関する知見を有しておりました。ダンテは「地獄篇」第19歌において、「刺客」には言及しておりますが、その主人たる「老人」には言及しておりません。また、ダンテが作者なのか曖昧な2つの作品、『花物語』（*Il Fiore*）と『愛の詩』（*Detto d'Amore*）では、「刺客」と「老人」が組をなして言及されております。ハンドアウトの13から15をご覧ください。ダンテも「山の老人」に関する情報をもっていたと考えても、おそらくは問題がないでしょう。

さて、「山の老人」は『モルガンテ』ではどのように描かれているのでしょうか。ハンドアウト18に概略を掲げておきました。注目すべき第1点は、プルチの作品では、「老人」が「刺客」と組をなして登場するのでないということです。13世紀の詩人たちのもとでは、貴婦人への忠実な愛を説明するための、「範例」（*exemplum*）という小さな道具にすぎなかった「老人・刺客」という組は解消されて、「老人」という1個の登場人物として独立します。サラセン教徒だった「老人」は、改宗してオルランドや彼の従兄弟リナルドの仲間となり、個性のある人間として、さまざまな活動を展開します。その活動は、彼の死によって終わるのではなく、彼の兄弟（カラヴリオーネとアルキラージョ）や甥（ディリアンテ）、息子（ブイアフォルテ）によって引き継がれオルランド伝説を織りなしてゆきます。プルチは「老人」らに実に多くの詩節、たくさんの頁を費やしております。「山の老人」は、『モルガンテ』において、13-14世紀の詩人たちの場合と比較すると、はるかに大きく発展していると言えます。

ダンテら、13-14世紀の詩人・作家らが知っていた東方世界には、プレスター・ジョン（プレーテ・ジャンニ [伊]）がおりました。これは、キリスト教徒の、東方に君臨した伝説上の司祭・君主で、サラセン教徒と対立する存在ですが、ハンドアウト5の冒頭にあるように、オドリーコはこの君主国の近隣に「山の老人」の領土を位置づけております。ハンドアウト13-14にあるように、『花物語』と『愛の詩』は、ジョンを「老人」および「刺客」と組み合わせる表現手段としておりますが、プルチはジョンをインドに位置づけております。脚注4をご参照ください。（引用を始めます）「[リナルドとその兄弟たちは]インドのプレスター・ジョンのところまで行き、そこで長年にわたって[このキリスト教徒君主ジョンのために]戦った。」（引用を終わります）。ただし、『モルガンテ』の中では、「山

の老人」と比較すると、ジョンは物語を生みだしてゆく積極的な役割を果たしておりません。『モルガンテ』は長大な作品ですが、ジョンが登場するのは、いま引いた2行においてのみであります。

ここまでは、オランダを手がかりに東方世界に対する関心を追いかけてきましたが、眼差しを西に向け、日常世界の枠の外に飛び出す旅を探してみましょう。ハンドアウトDに掲げた資料に基づき、「ジブラルタル海峡の彼方への旅」について考えてみましょう。『神曲』では、「ウリクセース（＝オデュッセウス）の歌」とも呼ばれる、「地獄篇」第26歌がすぐに関心を惹きます。ダンテが語るウリクセースは、地中海で遍歴の旅を繰り広げた後、晩年になって、西の最果てジブラルタル海峡にたどり着きます。そこには、ヘラクレスが柱を建て、海峡を越えてゆこうとする航海者を戒めていました。ウリクセースは仲間らを励まし、人の住まない世界へと旅立ってゆきます。ハンドアウトの19-20を参照してください。19を読んでおきましょう。（引用を始めます）「私 [=ウリクセース] と仲間たちは年若い、[身動きも] 遅くなっていた。その時われらはあの狭い出口 [=ジブラルタル海峡] に着いたのだった。そこにヘラクレスは敬うべき標を建てたのだが、人がもはや先には進まないようという合図であった」（引用を終わります）。また、準備した図表（Cosmografia Dante）をご参照ください（ハンドアウトの末尾にあります）。ダンテは、陸地は北半球に集中しており、南半球には煉獄の島を除けば海ばかりであると考えていました。その煉獄のそばまでウリクセースはたどり着きますが、つむじ風に巻きこまれ、回転しながら海底に消えて命を終えます。ダンテの同時代人には、ジェノヴァ出身のヴィヴァルディ兄弟がおり、ジブラルタル海峡の外へと冒険を試みましたが、消息が絶えました。

プルチが、ウリクセースのこの最後の旅を知っていたことは、ハンドアウト21からも明らかです。リナルドに、恋人ルチアーナは自分の手で豪華に飾り立てたテントをプレゼントしますが、このテントには「ヘラクレスの柱」の彼方に赴いたウリクセースが描かれていました。このリナルドを、プルチはウリクセースに対応する人物に仕立てあげ、「ヘラクレスの柱」を越える遍歴の旅に出させます。ハンドアウト22を参照してください。読んでおきましょう。（引用します）「ある日、リナルドはカルロ大帝に、自分は宮廷を去り、ウリクセースのように全世界を探索したいのだと明かした。カルロは悲しみに息が絶えるかと思ったほどだったが、ついにはリナルドに祝福をあたえた。オランダの仇を討った後で、世界を遍歴しようとしていたのだから、誰もリナルドに異を唱えることはできなかった」（引用を終わります）。ロンチズヴァッレの戦いが終わり、ガーノ（オランダが死ぬように策略を練った裏切者）を処刑してオランダの仇を討ってから、リナルドは限界を越える旅に出るわけですが、ハンドアウト23にもあるように、彼はすでに年老いています。ちょうど、「ヘラクレスの柱」を越えていったウリクセースが年老いていたように。23の一部だけを読んでおきます。（引用します）「リナルドはすでに年老いていたが」（引用を終わります）。

リナルドをジブラルタル海峡の外へと旅立たせたプルチは、どのような地球像を抱いていたのでしょうか。その手がかりとなるのが、ハンドアウト24から26までです。コロンブスがアメリカ大陸を1492年に発見しますが、28歌（cantare）からなる『モルガンテ』（いわゆる『大モルガンテ』*Il Morgante maggiore*）が出版されるのが1483年ですから、プルチはアメリカ大陸の発見よりも約10年前から、「ヘラクレスの柱」の向こうに人間が住んでいることを

予想していた、あるいは知っていたことになります。ダンテとは異なり、南半球は無人の世界ではなく、人間たちが住みつき、キリスト教とは異なる宗教を持ちつつも、動植物に囲まれて暮らしており、戦争を行うという点では北半球の人間と同じであると、プルチは見なしています。「ヘラクレスの柱」を越えての航海は可能であり、世界の端で海が滝のように落ちてゆくと考えるのは誤りであり、大地は球形だから、海はどこまで行っても平坦に広がっていると、プルチは考えていました。そして、ハンドアウト26に見られるように、警告としての「ヘラクレスの柱」は恥ずべき誤りに立脚していたと断罪します。いささか長いですが、26を読んでおきます。（引用を始めます）「光明に乏しい長い誤りが、幾世紀にも渡ってそう [=誤りだと] 認識されなかったため、[この標は] <ヘラクレスの柱>と呼ばれるようになり、その向こうでは多くの者が命を失ったと言われるようになった。だが、この考えは虚しいことを忘れるな。[柱よりも] 先へは航海することができるからだ。なぜなら、大地が球形だとしても、海水はどこにおいても平坦だからだ。昔、人類はずっと愚鈍だったのだ。その結果、ヘラクレスもやはりこんな標を立ててしまったことに[恥入って] 頬を赤らめることだろう。それというのも、船はもっと先へと渡ってゆくからだ」（引用を終わります）。

興味深いのは、『モルガンテ』を完成したプルチは、ジブラルタル海峡の彼方へさらに旅を続けることを拒否することです。ハンドアウト27を読んでおきましょう。（引用を始めます）「私は自分の船 [=作品『モルガンテ』] を港 [=終着点] まで導いた。今はもはやアピラ山やカルペ山 [=ジブラルタル海峡、地中海と大西洋の境界] を侵してまで試みたくはない。それというのも、わが船頭はさらに先へと渡っては行かないからだ」（引用を終わります）。長い『モルガンテ』という物語詩が完成して、プルチは休息することに満足していたのでした。

さて、日常世界の「枠組」の外へ出てゆく旅人たちに焦点をあてて報告を進めてきました。オランダは東方の限界を越えて旅する者、ウリクセスとリナルドは西方の限界の彼方に行く旅人でした。彼らの旅の共通点としては、場所的移動が水平方向に展開してゆくことだと言えるでしょう。ここで注目しておくべきは、ダンテです。私が指しているのは、『神曲』の作者としてのダンテではなく、『神曲』の登場人物として「あの世」を旅するダンテ、『神曲』で「私」と語っている者のことです。すでに参照した図表をもう一度ご覧ください。『神曲』の「私」は、ウェルギリウスに案内され地獄の奥底まで降りてゆき、地中を通ってエルサレムの裏側に位置した煉獄にたどり着き、その山を登り、頂上に位置した地上楽園に入ると、そこでベアトリーチェと再会し、今度は彼女の道案内にして天空へと旅立ちます（ちなみに、彼女が「私」に語りかける時、「ダンテ」と呼びかけます）。この旅は、オランダやウリクセスの旅とは異なり、垂直方向に展開する旅でした。この違いにもかかわらず、「私」もやはり「枠組」の外へ旅した人物です。「この世」を出て「あの世」に入りこんでいったわけですから。ウリクセス（彼は年老いたが、まだ生きて旅人です）が「あの世」の寸前まで旅してゆきながらもそこに入ることはできなかったのは異なり、特別な恩寵を受けていた「私」は別のルートを通って煉獄にたどり着き、「あの世」を旅して回ります。したがって、限界の彼方へ旅する者としては、オランダ、ウリクセスやリナルドに、『神曲』の「私」、ダンテを加えておかねばなりません。

最後に残ったハンドアウト28を一瞥しておきましょう。カンパネッラは「牢獄にて」 (*Al carcere*) と題されたソネットの中で、ウリクセースの名はあえて挙げてはおりませんが、大海に乗りだしてゆく彼を飽くことなく真理を探求する者として捉えています。この探求者が、カンパネッラのように、牢獄に閉じこめられることになったら、由々しき事態です。現在の日本はそのような事態に陥る危険は比較的小さいかもしれませんが、それでも注意深く用心するべきなのでしょう。それゆえ、やや長いのですが、28を読んでおきたいと思います。(引用を始めます) 「牢獄にて——重さをもつすべてのものは、円周から中心へと向かう。また、ふざけ好きだが臆病なイタチは、怪物の口に落ち、やがて食われてしまう。ちょうどそのように、大きな学識を愛する者は、誰でも真理に惚れこんで、大胆にも淀んだ水路から大海へと乗り出すが、結局、最後にはわれらの宿 [=牢獄] に足をとどめることとなる。この宿をポリュフェモスの洞窟と呼ぶがよい、あるいはアトラスの館と呼ぶがよい。それをクレタ島の迷宮と呼ぶも、地獄の最果てと呼ぶもよかろう。ここでは、好意も知恵も憐れみも、役立ちはしないのだから。だが誓って言おう——そして言いながら私はすっかり身を震わせる——、この宿は秘密の圧制に捧げられた砦なのだ」と (引用を終わります)。

以上で、私の報告を終わります。ご静聴くださり、ありがとうございました。

1. 「煉獄篇」第30歌55行参照。